

〈書評〉

坂井祐田 著 『仏教からケアを考える』

小池 孝 範

本書は、平成二十五(二〇一三)年に京都大学大学院教育学研究科より博士(教育学)の学位を授与された博士論文「仏教思想に基づくケア論の展開」がもとになっている。著者は仏教学、臨床心理学、教育学を修め、現在は真宗大谷派の僧侶であると同時に、臨床心理士としてスクールカウンセラーも務めている。こうした著者の幅広い学問背景や問題意識に基づいて、これまで関連付けて研究されることの少なかった仏教とケアの二つについて、「ケアの問題を見つめ直すために、仏教という先人たちの積み重ねてきた深い思索と叡智に尋ねてみる」という方法によって結びつけている。

これがいかなる形で展開されているのか、まず、目次によって確認したい。

目次

序章 仏教とケアとの関わり

第一章 ヒューマニズムに基づくケアを超えて

- 第二章 先行する仏教的ケア論の検証
- 第三章 ケアする人の精神的態度——慈悲——
- 第四章 ケアする人の自己変容——仏性——
- 第五章 ケアの関係性はどのように深まるのか——縁起——
- 第六章 ケアの関係性にはたらく生成力——聞法——
- 補論 ケアの関係性が死の向こう側に開かれること
- 第七章 死の向こう側に開かれることの意義——浄土——
- 第八章 死者に向けられるケア——回向供養——
- 第九章 死者との実存協同——還相の菩薩——
- 終章 仏教思想に基づくケア論から見えてくること
- 参考文献
- あとがき

目次を概観すると、仏教とケアが、いくつかのキーワードのもとで論じられていることが看取される。では、いかなる視点でこの両者が関連付けられているのか、「序章」から著者の立場を整理してみたい。

著者は、仏教を既成の宗派・教団、〈形ある仏教〉の枠組みによらず、「仏教という形ができる以前の、動態的な〈形のない仏教〉」としてとらえ、「動的宗教の源泉」、「〈形のない仏教〉の核心」を「霊性Ⅱ無分別智」に見出す。その上で、仏教を「形ある世界、分別の世界を包括する、霊性的自覚において顕現するはたらきである」と定義づける。

また、ケアの一般的な意味について「何かについてケアしている」という意識状況を指すのであり、そこでは必ず

何らかの対象が希求され、その対象は人、すなわち、「ヒューマンケア (human care 対人援助)」であるとする。著者は、この「ヒューマンケア」は、「あくまでも人間中心、人間と人間の関わりにおいてケアが成立する、というヒューマンニズムの考え方が基礎になっている」と指摘する。しかし、本来、ケアは「人間を超えた何らかのはたらき」、すなわち「超越的な広がり」をもつものであり（それを著者は「スピリチュアリティ」と総称する）、ヒューマンニズムの考え方に基礎をおく限り、そうした広がりには看過されるとする。

そこで、著者は、「ケアの問題を考察する観点として、形なき仏教Ⅱ霊性の視座を導入し」、「霊性Ⅱスピリチュアリティに開かれたケア、すなわちスピリチュアルケアをどのように理解したらよいかを改めて提言すること」を本書で試みることを提示する。

この試みに際し、著者は、(1) ケアする人が霊性Ⅱスピリチュアリティに開かれること、(2) ケアの場に霊性Ⅱスピリチュアリティがはたらくこと、(3) 霊性Ⅱスピリチュアリティの広がりとしての死の向こう側の三つの論点を提示し、この三つの論点を、七つの仏教概念を軸として検討していく。以下、本書の章立てにしたがって、検討の内容を概観したい。

第一章では、序章での問題設定をふまえて、ヒューマンニズムを思想的基盤する現在のケア (care) の抱える課題が「スピリチュアルケア」を通して批判的に検討され、新たなケアのあり方が示される。この新たなケアの基盤に「霊性Ⅱスピリチュアリティ」をおき、そこへの目覚めのプロセスが「理念としてのスピリチュアルケア」の場において起こってくる事態であることが示される。

続く第二章では、これまでの仏教的ケア論の意義が、様々な歴史的な慈善救済活動、ビハラー運動等の具体的な実践から検討され、仏教思想をケア論に導入することによって「非合理的な人間の苦しみの現実を非合理的なままに受け止めるながらも、その現実とともに生きる融和の方向性」が見出されることが提示される。

第三章では、ケアにおける「ケアする側」の態度が検討される。著者によれば、これまでのケアの営みにおいては、ケアする側の過剰なまでのケアへの没入や、疲弊によるケアの放棄が「不可避免的に起こってくる」のであり、これは、ギリガンやノディングスなどの、現代に大きな影響を与えている「ケア」論でも十分に克服し得ない課題であることが示される。こうした課題に対して、仏教的な「慈悲」をケア論に導入することによって、著者は応えようとする。著者によれば、「慈悲」によって「ケアする人格」は「超越の次元」に開かれ、「ケアの主体」が「転換」されるが、このあり方をケアする人が自覚するとき、「そこに開かれるケアの営みは、弛まぬ豊かな創造性に溢れることになる」と結論する。

第四章では、ケアする人の「自己変容」が主題となる。著者は、「自己変容」は、「自己から離れること、自己への執着から自由になることを転換点とする」とし、その具体的あり方の例として、道元禪師「現成公案」の一節における「自己をわする、」こと、すなわち「万法に証せらる、」ことを「自己変容」の核心としてあげる。そこで著者は「仏性」の語に注目し、「仏性」＝「如来蔵」の立場から『大乘起信論』を中心に検討し、「仏性をめぐる自己変容のあり方」を、著者による「仏性」の三つの位相——如来蔵／無漏種子／真如——に即した展開として集約する。

第五章では、第四章で検討した「自己変容」について「関係性」の視点から再構成し、「自己の内なる関係性へと開かれること、自己が世界との関係において在る、その全体性に触れること」であるとする。その上で、現在のケア論の基本とされるメイヤロフやノディングスのケア論が「結局のところ、西洋的な自我中心の論理」という思考様式に立っていると批判し、それを乗り越えていく方途を「法界縁起」に求め、その理論に基づいてケアの関係性の深まり、成熟過程について描き出そうとする。この分析をもとに、「ケアの関係性とは、その時その場における『縁』を形づくるもの」であるとする。

続く第六章では、真宗カウンセリングを中心に、その背景にある「聞法」を軸として検討される。ここで著者は、

カウンセラーに求められる「聞く」という態度と「聞法」の違いに注目し、ケアの営みにおける「聞く」ことが「受容」を意味するのに対し、「聞法」においては、こうした受容的態度をふまえて、「相手の言葉を、そして相手の存在の意味を、そのまま根源的実在である〈法〉からの呼び声として『聞く』ということであるという。こうした「聞法」の立場を前提とする真宗カウンセリングは、つねに「根源的実在としての〈法〉」に照らし出されているとする実感をもって実践されるのであり、ここに「ケアの営みが究極の指標とすべき原理」を見出している。

第七・九章に先立って、補論として「ケアの関係性」と「死の向こう側」が論じられている。この章では、ここまです論じられてきた「超越の次元」の問題が、「死」という具体的出来事に基づいて、「死の向こう側の世界」と「ケアの関係性」が検討される。この補論を境として、第七章以下では、「死」および「死者」が主題化されてくる。

第七章では、「死の向こう側に開かれることの意義」について、「浄土＝他界」の思想、特に「浄土往生から現世に帰還するという還相の側面を強調」する親鸞の思想に注目して検討される。著者によれば、親鸞における「浄土とは、相対分別から脱した絶対の世界であり、原理的にいえば、法性＝真理を象徴した一つの表現」であり、その「浄土から帰還した還相回向のあり方、すなわち絶対他力の信心に立って世界と関わることに開かれる精神的相貌は、『生命愛』への目覚めである」という。このように捉えることによって他界は「こちらに呼びかけてくるような、実在的なはたらき」としての意義をもつことを示す。

第八章では、「死者に向けられるケア」として「回向供養」が検討される。著者は、死者のケアには、「死者を徹底的に対象化してこれを変容させるか、ケアを通して死者に思いを向ける者の自己変容が実現するか」の二面があり、前者は「日本仏教の死者供養のあり方を基盤とする〈回向＝供養〉システム」、後者は「回向」の考えから「供養」を独立させた〈回向＋供養〉であるとし、後者の典型として「親鸞思想に立脚した浄土真宗の死者供養」をあげる。こうした「親鸞浄土宗の死者供養の考え方」は、「死者に向けられた思い」を自己洞察へと深化させ普遍の世界に目覚

めさせる通路を切り開く」ことになるとする。

第九章では、田辺元の「死者との実存協同」の考え方をもとに、「仏教思想がケア論として開かれる、その構造的契機」が探られている。著者は、「実存協同の考え方の原初的枠組み」として、「相対存在である人間が、死復活という絶対無の覚醒体験を経て、そこから絶対無即愛のはたらきに促されて、他の人間へと覚醒体験を継承しながら歴史的協同性を形づくっていくこと」をあげ、それを「先進者Aから後進者Bへ、さらに先進者Bから後進者Cへと不断に続いていく運動」としてとらえる。その上で、具体的な「グリーフ・ケア」の場面に即して「ケア」の課題が検証され、「死者との実存協同」の思想が、「自己中心の生を見つめ直し、その窮境から解放させる力」となるといふ。

終章では、「本書に流れている問題意識」が、「筆者自身の思想遍歴」に寄せて確認されている。ここまで概観してきた各章に即して整理すると、本書の三つの論点の鍵概念となる「自己変容」、「関係性」、「実存協同」の三つの構造契機が、「自己変容→関係性→実存協同→……」という循環構造をなしており、それが仏教思想に基づくケア論の土台となっていることが示される。さらに、「超越の次元」に開かれたケアのあり方が本来的なあり方であり、西洋近代のヒューマニズムの問題を乗り越える新たな視点として、「超越の次元からの働きかけに気づくこと、開かれていることが、人間同士のケアの営みを豊かにし、成熟させる」ことが結論とされている。

以上、本書を各章にしたがって概観してきたが、仏教学、臨床心理学、教育学という多様な学問背景をもつ著者の該博な知識に基づき、多面的、多角的に「ケア」の問題が検討されていることがうかがえる。時にそれは、「ケア」から離れているように思われながらも、最終的には「ケア」論へと収斂していく上で不可欠な議論の伏線となっている。評者の専門とする教育学の分野でも、近代教育学の様々な面での行き詰まりが指摘される中で、そこに新たな可能性を開くものの一つとして「ケア」論は注目されており、仏教の視点から「ケア論」を再構築しようとする著者の試みは、示唆に富むものであった。

その上で、浅学を顧みず、本書を通じて感じた疑問について、二点を指摘してみたい。

第一に、本書では「西洋近代主義を背景としたヒューマニズム」の限界を指摘し、「スピリチュアルケア」の視点からこれ乗り越えることを企図していることが示されているが、「スピリチュアルケア」ないし「スピリチュアリティ」と「ヒューマニズム」の関係がつかみにくかった点である。

現代における「スピリチュアリティ」への注目が、「ヒューマニズム」の流れをふまえつつ、それを批判的に乗り越えていこうとしていることを背景としてもつことをふまえると、「ヒューマニズム」か「スピリチュアリティ」か、といった二項対立的視点だけでなく、両者を包括するより広い視点を提示することも可能だったのではないだろうか。むしろ、本書はそうした視点が随所にみられるし、特に、「終章・エピソード」における、經典読誦をやめてしまった親鸞のエピソードの分析は、「ヒューマニズム」を包含する、より広い視点の可能性を示唆している。

第二に、本書の全体を通じて検討されている「ケア」の関係が、「どんな立場」にある、「誰に」、「どんな場面で」求められるあり方なのかが判然としなかった点である。本書の前半、特に第一章から第三章、あるいは第六章が、専門的なケア、「職業としてのケア」が念頭にあるように感じられる一方、後半、特に第七章、第八章は、仏教者に求められるあり方が想起された。また、本書全体は、現代社会に生きる人々全体に向けての内容が含まれていると受け止めた。そのため、いずれの場面で求められるあり方なのか（これは評者の知識不足、経験不足によるところが大きいだろうが）、具体的に想起しにくい箇所が散見された。理想的、究極的にはすべての人間に、様々な場面でこうしたあり方が求められているといえるだろうし、カウンセラーとして実践し、かつ、仏教学、真宗学、臨床心理学、教育学という多様な学問背景をもつ著者だからこそその広い視野からの提言であるともいえるだろう。ただし、具体的な場面を含む、実践的視野があると、より多くの読者に著者の「思い」を伝えることができたのではないだろうか。

